

はしがき

家族法は、理解しやすい法律である。

たとえば、多くの人にとって「意味不明」といえる株式の取引や企業合併に関連する法律などとは違い、家族法は、「自分」や「家族」に関係する内容が主要な部分となるので、法律が伝えたい事をイメージしやすい「やさしい法律」である。

また、身近な問題を取り上げる家族法は、「試験のために覚える法律」というよりも、これからの人生において「覚えておいて損はない法律」といえる。現在は、親子の絆やつながりが薄れがちであるが、夫婦や親子の関係といった身近な問題に目を向け、改めて家族について考える時間を持つことは、決して無駄にはならず、有益な時間となるはずである。だから、「法律」を学ぶというよりも、一つの「教養」として、家族法を身につけてほしい。

繰り返しになるが、家族法は、理解しやすい法律である。

簡単なことを難しく説明したり、難しいことを難しく説明すれば、結果として法律は難しいということになる。本書の狙いと願いは、「法律」の語句がもたらす独特な「拒絶反応」をできる限り少なくしてもらい、とりあえず法律の本を読むという、大きな一歩を踏み出してもらうことにある。

そのため、ページ数はできるだけ少なくする反面、「つまり」や「たとえば」を多用して理解してほしい内容を、かなりの行数を使って、繰り返し説明するという、矛盾したテキスト作りに挑戦しているので、家族法として説明すべき項目をかなり厳選している。

よって、説明不足や説明が分かりにくいところ、物足りなさを感じるころなど、多々、存在すると思う。お手数にならない範囲で、お読みいただいた方の感想や批判をいただければ、著者にとって最高の幸せである。

本書の読み方を若干説明すると、必要に応じて「補足」や「コメント」「例示」を挿入してある。「補足」は基本的に語句の意味や内容などを説明してい

るので、是非、目を通してほしい。「コメント」は本文には載せなかったが、内容の理解に役立つと思われるので、難しい部分もあるが、できれば読んでほしい。そして「例示」は実際に裁判で争われた内容を簡単に示しているので、どのような問題がどのように解決されるかをみてほしい。

また、各章の終わりに、ちょっと考える話題を提供する「ちょっと考えてみよう」と「じっくり考えてみよう」とを用意した。

まず、「ちょっと考えてみよう」では、話題に対して自分ならどう考えるかを考えてほしい。「裁判所が知っているから」とか「先生が授業でいていたから」といった、テストの解答用紙に書くような一般的な答えはあるが、いろいろな考え方、自分なりの答えがあってもいいはずである。

たしかに、「答え」が明確に示されないのは不安になるかもしれないが、ちょっと考えて、楽しんでほしい。そして、ちょっと時間を取って、自分の考えを友人や家族に披露して、話し合ってみるのも良いと思う。必ず、プラスになるはずなので、気楽に挑戦してみてください。(ただし、自分の考えを他人に押し付けるのは良くないので注意してほしい。また、自分の考えを「最高だ」と思っても各種試験の解答としては通用しない場合があるので重ねて注意してほしい。)

次に、「じっくり考えてみよう」では、ちょっと「ややこしい話」を取り上げる。それぞれの経験や人生観で、物事に対する考え方は異なると思うので、じっくりと考えてみてほしい。

最後になったが、本書の作成を了承し、出版するという大冒険を成し遂げて下さった、法律文化社、ならびに担当していただいた上にいろいろとアドバイスを下さった畑光さん、舟木和久さんには、本当に感謝の言葉も見つからないほど感謝している。とくに、筆が遅い著者に対して、急ぎ立てる事もなく、悠然と待ち構えて下さる畑光さんには、度量の大きさを感ぜずにはいられなかった。この場を借りて御礼申し上げたい。

平成22 (2010) 年 3 月

川村 隆子